新春 市長鼎談

# 共生の思いをつなぐ アート・スポーツ

障害者アートやパラスポーツに関わるお二人をお招きし、郡市長と語り合っていただきました。ゲストは、障害のある方の表現活動を支援するNPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事の柴崎由美子さんと、東京2020パラリンピック車いすバスケットボール銀メダリストの豊島英さんです。

会場
ウェスティンホテル仙台

**市長**　あけましておめでとうございます。豊島さん、昨年の東京パラリンピック車いすバスケットボールでの銀メダル獲得、本当におめでとうございます。

**豊島**　ありがとうございます。パラリンピックは3度目の出場で、メダル獲得を目標に掲げて練習してきました。自分たちの力を出し切れば上位にいけるという自信を持って戦いました。

**市長**　手に汗握りながら、力を込めて応援しておりました。試合を重ねるごとに強くなっていく姿、そして、あのスピード感や迫力に圧倒されながら拝見していました。

**柴崎**　私も実は高校までバスケをやっていまして、決勝戦をテレビで観戦しました。あの筋力や瞬発力は、私の想像を超えるトレーニングで鍛えられたものなのだろうと感じました。

**市長**　仙台の皆さんはもとより、日本中が感動したと思います。それではまず、お二人の活動のきっかけをお聞かせいただけますか。

**豊島**　中学2年生のときに、養護学校の体育の先生に勧められて体験会に参加したことが、車いすバスケを始めたきっかけです。自分もやってみたいと地元チームに加わり、自宅から1時間半かかる練習場に通い続けました。高校卒業後、地元福島の東京電力に就職し、日本代表の選手もプレーする「宮城MAX（マックス）」というチームに移籍しました。東日本大震災が発生し、バスケができない時期がありましたが、パラリンピックに出たいという夢があり、チームの練習拠点である仙台に住まいを移しました。

**豊島英さん**
元車いすバスケットボール選手。ロンドン・リオデジャネイロ・東京パラリンピックに出場し、東京大会で銀メダルを獲得。平成元年、福島県生まれ

**柴崎**　私は、美術大学の学生のときに、障害のある人の絵画作品に出合いました。才能ある人たちを支援したいと思い、絵を描く場をつくり、仲間と活動を始めました。卒業後、奈良市の福祉施設で障害のある人の芸術活動の支援に携わり、現在はエイブル・アート・ジャパンで、障害のあるアーティストの作品制作のための環境をつくること、作品を発表につなげることを活動として行っています。

**市長**　今日は、柴崎さんに障害のある方が描いた作品をお持ちいただきました。

**柴崎**　市内で活躍する5人のアーティストの作品です。月や山、船などを描いたのびやかな風景画や、音楽をモチーフにした色がとてもきれいな抽象画、カラフルな動物の作品など、どれも表情豊かなものです（5ページ写真参照）。

**市長**　いずれもダイナミックで、発想や着眼点がすごいと感動しました。

**豊島**　きれいに描くことだけが正解ではないなと感じます。本当に自分を表現できている、素晴らしい作品ですね。

**柴崎由美子さん**
NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事。奈良市の福祉施設「たんぽぽの家」の活動を経て、平成24年エイブル・アート・ジャパン事務局長、平成25年より現職。昭和48年、仙台市生まれ

## 仲間の存在が原動力

**市長**　豊島さんは、平成28年のリオデジャネイロ大会後から、日本代表チームのキャプテンを務められました。さまざまな年代の方がいらっしゃるチームをどのようにまとめられたのでしょうか。

**豊島**　個性豊かな選手を一つの方向に縛りたくないと思い、一人一人にリーダーになってほしいと伝えました。コートの内外にかかわらず、自分にできることでリーダーになり、チームに貢献する、こうした積み重ねで、チーム力が高まってきたと思います。コロナ禍（か）でも、オンラインを活用してチームミーティングを開くことで、代表としての自覚を持ち、トレーニングを途絶えさせないよう意識しました。仲間とつながり、お互いに目標を見失わずにいられたと思います。今回のパラリンピック出場12チームの中で、チームワークでは日本代表がナンバーワンだったと感じています。

**市長**　そのチームワークが、メダルに結びついたのですね。

**豊島**　どの試合も圧勝ではありませんが、勝つためのシナリオが一人一人に根付いていたので、いくら負けていようが最後に逆転できるという自信とイメージがありました。あとは自分と味方を信じてやるしかない。前回のリオデジャネイロ大会と比べてチーム力が格段に上がったことが、結果に結びついたのだと思います。

**市長**　柴崎さんは、ご自身が絵を描くのではなく、支える側に回られていますね。

**柴崎**　アトリエに子どもたちが集まって楽しく活動することで、本人も周囲も笑顔になります。子どもたちの自由な表現や豊かな感性が評価されると、保護者の見方も変わり、みんなが楽しい気持ちになる、それを応援することに醍醐（だいご）味（み）を感じています。障害のある人は、身近にアートに取り組む環境がないと活動をすることが難しいので、そうした現場をつくるためには、バスケと同様にさまざまな人とのチームワークが大切になってきます。昨年のオリ・パラや、平成30年の障害者文化芸術活動推進法の施行などを契機に、全国的に障害者アーティストが活躍できる社会環境が整ってきたと思います。

**市長**　障害者アートは、ヨーロッパでは早い段階から注目され、美術館などで目にすることも多くありますが、日本でも柴崎さんのように支える側が増え、アーティストの活躍の場も広がってきました。

**柴崎**　ここ仙台でも、公募展などの華やかな機会を準備してくださる企業もありますし、一人の表現者としてのアーティストに憧れてボランティアになる人もいます。障害のあるアーティストの活躍機会をつくりたいというポジティブな動きと、アーティスト自身の意欲の高まりが結びつき、作品が商品化され、流通につながり始めている動きもあります。また、私たちNPOは、福祉の現場だけでなく、まちなかで絵画制作や人形劇を行っています。障害のある人が当たり前にそうした活動に参加している風景を、まちのあちこちにつくりたいと思っています。

**市長**　障害のある方にとって、活動する場があるということ、一緒に活動する仲間がいるということはとても大切ですね。

## アート・スポーツの力が生きる力に

**市長**　震災後、サッカーのなでしこジャパンのワールドカップ優勝や、プロ野球の東北楽天の日本一もあって、スポーツの持つ力が、復興に向けて立ち上がる大きな力になったと感じました。豊島さんは震災当時、バスケを続けるかどうか、迷いがあったそうですね。

**豊島**　当時は福島にいて東京電力の社員でしたが、自分だけが好きなバスケをやっていていいのかと、気持ちがバスケに向かない時期でした。それでも、僕がパラリンピックを目指してきたことを知る周りの方たちが、苦しい時期に背中を押してくれました。また、東京電力の同僚がなでしこジャパンで活躍する姿にも力をもらい、自分も元気を与えられる立場になれるのではと思いました。あのとき、続けることを決意して、学び成長しながらここまで来れたと思うと、そのきっかけをくれた、スポーツの力に感謝しています。

障害のある人もない人も一緒に取り組む「SHIRO Atelier & Studio（シロー アトリエ スタジオ）」の人形劇では、みんなでアイデアを出し合い物語を作り上げていきます

**市長**　柴崎さんは、東京からボランティアで被災地にいらっしゃったと伺いました。

**柴崎**　ボランティアで石巻市や山元町へ行き、仕事も何もかもなくなってしまった沿岸部の福祉事業所を目の当たりにしました。そのような中、描くことを通じて、少しでも楽しさとか柔らかい気持ちを持てればとワークショップを続けてきました。一方、被災者を勇気づけたいと、障害のある人たち自らが仮設住宅で歌や踊りを披露したり、絵画を展示したりする活動を行った福祉事業所もありました。そのたくましさや文化が持つ価値を多くの人と分かち合いたいと思い、発信もしてきました。

**市長**　障害のある方も、自分たちの活動で周りの人たちが笑顔になることを、生きる力に変えてきたのですね。

**柴崎**　スポーツの力と同じで、文化活動を担うアーティストたちも、自分が自分であることを表現するためだけに作品を生むのではなく、それが誰かの何かのためになるということを震災により自然と理解したと思います。コロナ禍で、アトリエが開けない時期もありましたが、淡々と描き続けたりオンラインで作品を発表し合ったりするなど、とどまることなく前に進んでいきました。

**市長**　スポーツもアートも、何か人間の生きていく力そのものにつながっているように感じます。

## パラリンピックを経て高まる共生への思い

**市長**　お二人に今後の活動などを聞かせていただきたいと思います。豊島さんは昨年10月、選手生活を引退されました。まさに有終の美を飾った東京大会でしたね。

**豊島**　引退はSNSを通じて発表したのですが、一パラスポーツ選手の話題がニュースとして取り上げられて驚きました。パラリンピックを機に、パラスポーツ選手に対する見方が少し変わってきたのかなと感じます。今後は車いすバスケットボール界に恩返しをしたいと思っています。新しいスタートとして、日本車いすバスケットボール連盟の委員を務めることになりました。後輩や子どもたちが、バスケをしやすい環境を整え直すような役割を担っていきたいと思っています。車いすバスケは、一つのスポーツとして、見る価値も、やる価値もあります。障害者だけでなく、健常者の子どもたちも車いすバスケを体験し、継続できるような機会をつくり出せたらと思っています。

東京2020パラリンピックでプレーする豊島さん
（写真：ロイター／アフロ）

**市長**　豊島さんは地域の小学校で、車いすバスケの体験会なども行っていらっしゃいます。

**豊島**　子どもたちは純粋に車いすバスケを楽しんでくれます。パラリンピック終了後、たくさんの講演依頼がチームに入ってきました。メダルを取ったことで終わらせてはいけないと思っているので、パラリンピックを見て感動した子どもたちに、バスケでも別のものでも、自分のやりたいことを見つけて、努力していくことの大切さを伝えていきたいですね。絵やスポーツなどを入り口にして障害に触れることで、自分たちと同じだという認識を持ちやすく、共感できることもたくさんあると思います。そういうことから、障害理解や社会を学んでほしいと思います。

**市長**　車いすバスケの体験を通じて、小さい頃から障害のある方や車いすなどに触れることで、スポーツとしての魅力も相まって、障害理解が深まっていくのですね。

**柴崎**　オリ・パラが終わって、これからが勝負だと思っています。こうした、障害のある人が活躍できる場を持続的に提供し、その環境をより良いものにしていく取り組みをしっかり行っていきたいと思います。その一つとして、昨年から市の教育委員会と一緒に、障害のある方の学びの場をつくる活動も始め、2月には「きいて、みて、しって、見本市。」の中で活動報告会を行います（18ページ参照）。また、私たちのNPOには、コロナ禍により、孤独・孤立を抱えた障害のある人からの相談が増えていて、新しい課題も出てきていると感じています。そうした人が少しでもつながりを得られるような場もつくっていきたいですね。

**市長**　最後に、仙台がこんなまちになってほしいという思いを、お聞かせいただけますか。

**豊島**　一人一人が輝けるまちであってほしいです。年代などに関わらず誰もが笑顔になれ、いろいろな人が関われるスポーツの実現が必要になってくると思います。選手だろうが、支える側であろうが、自分に合ったところで、活躍できる場が見つけられるようなまちだといいですね。

**柴崎**　明治時代に仙台に実在し、知的障害がありながらも純粋な笑顔が行く先々で受け入れられた、仙臺四郎（せんだいしろう）が生きてきた仙台が好きです。個性のある人たちを温かく受け止めながら、彼らが自分らしく生きられるような寛容なまちを、これからもみんなでつくっていきたいと思います。

作品提供（左から）：しゅんすけ、片寄（かたよせ）大介、奏（かなで）、工藤生（くどういくる）、浅野春香（2点）

**市長**　仙台市は昨年、これからのまちづくりの方針となる基本計画をまとめ、「自分らしい生き方が実現できる環境をつくる」を目標の一つに掲げました。障害の有無や年齢などの違いにかかわらず、誰もが熱中できるものに打ち込むことにより、一人一人の多様な個性が輝くまちづくりに、これからも取り組んでいきたいと思います。本日はありがとうございました。